

女性の社会進出と住居・職場・都市構造の 変化の関係性の分析に関する研究（一）

檜村久子
吉田ゆり

はじめに

本研究は、女性の社会進出と職場や住居、さらに都市構造の変化とどのような関係があるのか、ハード面から分析しようとするものである。女性の社会進出が職場や、住居、都市構造を変える面と、それらの変化が女性の社会進出を促す面の両面が考えられる。

本研究におけるソフトとハード、個人と社会の関係を表すと次のようになる。個人・社会の軸では、パーソナルな領域は住宅、中間組織の領域では職場レイアウト、保育施設、通勤、買い物・外出、パブリックな領域はランドデザイン、都市計画、社会資本・インフラ整備計画、アーバンプランニングがあげられる。その中で本稿ではまず女性の社会進出が個人や家族の生活が戦後どのように変化してきたかを知ること、また職場と住居の関係がどのように変化したかを現状から知る。研究の対象地として、大都市圏では大阪市と大阪市を中心都市とした大阪都市圏を取り上げる。

I 研究対象と研究方法

研究対象地として中心都市として大阪市とし、ヒアリング対象は女性とする。

女性の社会進出が具体的な個人の生活でどのように変化してきたかを知るため、まず三代目インタビューと、次に“働く女性とまちの移り変わり”を勤務経験のある世代別グループインタビューした。世代別インタビューでは、主と

して①家族に関わるもの、②住生活に関わるもの、③勤務先と勤務経験の経緯に関わるもの、④子育て経験のある人に対して子育て中の社会的サポートに関わるもの、⑤現在の仕事に関わるもの、⑥現在の職場のハードに関わるもの、⑦職場と自宅の間の場所と時間の過ごし方に関わるもの等を聞いた。

この中から、職場のハード面でどのような変化が起きたのか、今後職場でのオフィスのレイアウト調査に活かすため、調査項目などを取り出すことを目的とした。

次にこれまで、住居と職場が同じ市域にあった時代から、都市の発展、拡大によって住居が郊外に移り、職住近接から市外から通勤の形になる。このような職住分離は女性の働き方をどのように変えたのか。都市構造と住居の移動、大阪市の人口の流出入を調査した。

II 都市構造と住居の移動

大阪市では1920年代以降の市域の拡張によって、中心市街地と郊外との関係を創るため、都市計画が進められた。近代、戦前までは仕事場と家庭が同じ、または近くにある職住近接を旨としていた。しかし、産業構造の発展により公害などの都市環境の悪化を憂慮した富裕層の住居の郊外移転などもあり、中心部での商売と郊外の本宅という形ができていった。しかし地方からの流入都市労働者は中心市街地の周辺の工業地帯周辺地域に居住していく状況になる。戦後は、自営業者が減少し、サラリーマン・核家族が郊外に居住し、都心に通勤する形態に変わる。

「京阪神都市圏の重層的なりたち」(浅野慎一、岩崎信彦、西村雄郎編)によると、大阪都市圏は、大阪中心市街地、重化学工業地域・軽工業地域、労働者居住地域、インナーリングエリア、郊外住宅地域の5層構造が形成された。その外縁部に千里ニュータウンをはじめとするニュータウンが造成され、その都市構造により職住近接から職住分離の生活が形成されていくことになる。具体的に現在の大阪市の人口の流出入を見てみよう。

1. 大阪市の人口流出入

大阪市の人口流出入を調べると、周辺市町村から大阪市内に通う「在勤者」「在学者」である「昼間人口」が多い。流入人口は2005年の国勢調査から算出すると、堺市103104人、吹田市62980人、東大阪市62343人、豊中市61856人、神戸市59434人（上位5位まで）。

大阪大都市圏では、大阪市への流入人口は、周辺市町村から大阪市内に通勤する昼間人口が多く、東京都市圏に次ぐ大都市圏として流入規模は大きい。昼夜間人口比率は138.0%で、全国で最も高い。東京23区は135.1%である。

流入人口都市別上位20市

順位	市町村名	流入人口
1	堺市	103,104
2	吹田市	62,980
3	東大阪市	62,343
4	豊中市	61,856
5	神戸市	59,434
6	西宮市	56,649
7	尼崎市	47,598
8	枚方市	43,705
9	高槻市	35,745
10	八尾市	35,340
11	奈良市	35,013
12	茨木市	31,959
13	寝屋川市	29,088
14	京都市	28,143
15	宝塚市	24,739
16	守口市	18,863
17	松原市	18,827
18	川西市	17,900
19	和泉市	17,685
20	生駒市	17,489

2. 流入人口と男女比の特徴

都市構造から考えると、大阪で活動する女性たちの中で、大阪郊外から大阪市内に通勤する女性に視点を当て、さらにどのような地区に流入しているか、区別の昼夜間人口比率を調べた。2005年度（平成17年）の国勢調査を元にとすると、最も比率が高くなるのは中央区で761.8%、次いで北区430.4%、西区273.3%、天王寺区188.6%、浪速区183.4%と続いている。

その結果、流入人口の多くが、中央区、北区、西区、天王寺区、浪速区の都心部に極度に集中していることがわかる。つまり、大阪大都市圏の大阪というビジネス都市のビジネス地区に集中している。

さらに、流入人口の男女別、年齢別の分布を調べると、特徴的な数値が得られた。大阪市への流入人口には、男女差が大きいことである。

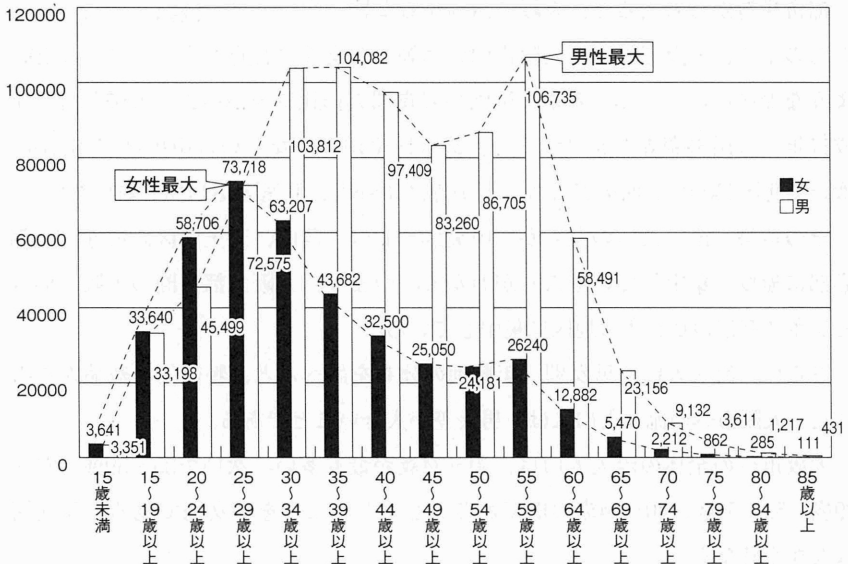
大阪市への全体の流入人口は、30～34歳が最も多い。次いで35～39歳、25～29歳、55～59歳、40～44歳の順である。しかし、これを男女別で見ると年代層は大きく異なる。

流入人口を男女の割合で見ると、15～19歳、20～24歳、25歳～29歳は女性の方が若干多い。しかし25～29歳をピークに減少し続ける。一般的には、日本の女性の女子労働力率は、M字型カーブを描き、30～34歳を底に、子育ての手が離れたら再び就労するという形にはなっていない。

つまり女性の就労に関するM字型曲線は大阪市の場合は描けず、再就職する女性の多くが大阪市内に再び流入するのではなく、別の都市、つまり住居地のある近傍で再就職することが推測される。グラフ（図1）のように、年齢層が上がるほど就労女性の人口が減少すると、職場における管理職など意思決定に関わる人材層が少なくなると考えられる。

もし、女性が結婚して大阪市内に居住し、子育て中も就労を継続できれば35歳以降の年齢層も増え、就労による経済力、職場での地位向上につながる可能性があると考えられる。

図1 大阪市の流入人口（性別それぞれの年齢ごとの変化を表したもの）



Ⅲ 働く女性と街の移り変わりを知る—世代別グループ・インタビュー

現在の大阪市と働き続ける女性の課題を知るため、世代別グループ・インタビューを実施した。日本の女性の場合、男性のように終身雇用が想定されていることが少なく、あるいは想定されていても、ライフステージで大きく変わることが多い。結婚、出産、夫の転勤、親の介護が転機になる。また女性たちが生きた時代の社会経済的状況の相違も影響を及ぼす。そこで、大阪で暮らす女性たちの世代別にグループ・インタビューから、多様性の実態を把握した。

グループ・インタビューは、大阪市内在住・在勤の20代、30代、40代、50代、60代の各世代で、大阪市内の事業所に3年間以上勤務した経験を条件に、1世代3人ずつ、1グループ120分とした。

以下に述べる内容は、同じ世代を代表することはできないが、平成20年代初めの時点の女性の暮らしの記録、証拠でもある。

1. 主として家族と住居に関わるもの

- (1) 家族構成（略）・・・独身（単身世帯、実の親などとの同居も含む）、夫婦のみの世帯、自分と子どもを含めた世帯、などいずれも含まれる。
- (2) 現住所（略）・・・大阪市内への通勤歴を条件としており、自宅住所は大阪市内、市外を問わない。大阪市中央区から神戸市北区まで広がっている。
- (3) 実家の所在
 - ・実母と同居、実父と同居の場合、介護のことを考慮に入れている。
 - ・大阪市外の近畿圏、西日本に実家がある場合が多い。
- (4) 居住地の変遷と居住地を選んだ理由
 - ・「夫も自分も大阪市内に通勤しているが、インターネットで情報収集し、子どもの医療費補助が手厚い自治体を選んだ」（20代）。「新婚世帯家賃補助」がある府内の自治体に住居を決め、子どもができればファミリーサポートのある別の市に転居。父母が子育て支援できる場所にいないので、必死に探す」（30代）
 - ・「同居の母が気に入った風景のある場所。地縁も親戚もないが」（60代）
 - ・「夫婦二人になれば外食にも便利で新しくて防犯のしっかりした都心のマンションがいいと浪速区に決めた。閑静な郊外なんて考えられない」（50代）
 - ・「子どもも含めた家族会議で決定。学校、通勤など全員の希望を聞いてエリアを決めた」（50代）。

(5) 同居する家族の勤め先

- ・ほとんどが大阪市内に通勤。本人が働いている場合もほとんど大阪市内。
- ・「夫の帰宅が毎晩23時過ぎなので、夕食は先にとり、風呂も先に入り、帰りを待たずに就寝」(30代)「夫がだいたい22時過ぎに帰宅するがちゃんと夕食をとらなくて心配なので起きて待って食べるのを見届ける」(30代)。

2. 主として住生活に関わるもの

(1) 日々の買い物の場所と行く時間帯

- ・「だいたい帰宅が22時前後なので、勤務先の近くのデパートの閉店時間までに入るか、最寄り駅から歩ける23時までのスーパーに寄る」(40代)「自宅の近くに24時間スーパーがあるので、帰りに寄る。主人と二人だと外食も多い」(50代)。

(2) 洗濯の時間帯（平日と休日）

- ・働いている人は、平日の洗濯が夜である場合が多い。仕事をやめると午前中にやるようになるという。
- ・「パートで扶養控除の範囲内にするため13-17時の勤務ということで会社と合意して働いている。だから平日の10時くらいに洗濯する」(20代)「週末にまとめてするが、それ以外は夜。夕食を準備しながら洗濯機を回す。子どもが小さい頃は、入浴が早い時間だったため、そのあと回すことにしていた」(50代)。

(3) 入浴の時間帯（本人と家族）

- ・「主人が遅いので子どもと私は先に入る。残り湯を洗濯（夕食を作りながらする場合が多い）にまわしたいが、夫がまだだから使えないとあきらめることが多い」(30代)。「追い焚き機能がないので、家族で順番に入る。自分の帰宅が遅いときは、同居の母に先に入っておいてというのだが、母はそうしないで待っていて後に入る」(40代)。

3. 主として勤務先と勤務経験の経緯に関わるもの

(1) 職業

- ・フルタイム勤務、パートタイム、契約社員、派遣社員、嘱託社員、などさまざま。ほとんどが会社員だが、夫婦で自営業の世帯も含む。
- ・「年間130万を超えると損をするので、時間を短くしてパート勤めをしている」(20代)。「余裕を持って家事をまわせるのは、パートの勤め先が10時過ぎの出勤だから」(50代)

(2) 現在の職場の勤務と期間

全員に離職歴があり、現在の職場に限れば、短い人はまだ数ヶ月、長い人は直近の仕事で22年間続けていた（60代）、あるいは16年間続けてやめたばかり（30代）などであった。

- ・「一番嫌なときを乗り切って仕事がやりやすくなった時に、これからずっとここに勤

女性の社会進出と住居・職場・都市構造の変化の関係性の分析に関する研究（一）

めるのか？という自問が始まり、その後とりあえず区切りを付けたいと思って辞めた。自分は総合職だが、一般職の同僚を見ていると、昇格等がないのでモチベーションを維持するのが難しそう」（30代）。「身体を壊して退職、妊娠して退職、大学に入り直して退職、会社都合で退職、最近その後続けていた高校の講師の仕事を休職にしたばかり」（30代）。「派遣を会社都合で途中で切られたりして嫌になり、現在アルバイトをしているが、市内でフルタイム勤務の仕事を探している」（30代）。「女性は30歳前後までといった求人が多かった」（40代）。「新卒で入った会社に10年勤めたら、区切りをつけようと考えようになり、退職した」（40代）。「専業主婦時代は、義父の介護をしていた」（50代）。「自分の新卒の頃は、男性は本店採用、女性は支店採用で、給与形態も違っていた」（60代）。「自分たちの就職する頃は、女子の場合は縁故で就職先を見つけてくる（見つけてもらう）ことが多かった」（60代）。

（3）勤務先

・ほぼ大阪市内（インタビュー対象者の基本的な条件としていたため）

（4）通勤所要時間

・近い人は10～15分、今回対象者の中で最も遠いのは100分前後かかる20代。時間については、バスが入ると時間が変動するので、随分早くに出なくてはならないという声もきかれた。

（5）勤務先の変遷（転勤、同居家族の転勤に伴う転職歴）

・全員が離職歴があった。
・離職の原因として語られるものはさまざま。上の「勤務期間」の事例にも挙げたように、「区切りを付けたい」というものもあり、必ずしも結婚や出産によりやむをえず離職しているばかりではないことがわかる。

（6）過去の職務の内容の変遷と、現在仕事をしている理由、していない理由

・「仕事は生活、趣味は精神、どちらも欠けてはならないと思っている。趣味を大事にするために残業がない会社で契約社員をしている」（20代）。「子育て中も社会から離れていたくないから仕事をする」（30代）。「1990年前後、若い人材が不足していた頃、職安の紹介で、10時出社、子ども夏休み中の休暇OKという条件の仕事を紹介され、今まで続けている。秘書的業務と事務全般で雇用もこなすが、やめないことが自慢」（50代）。「仕事はするものだ、と思っていた」（60代）。

4. 子育て経験のある人に対して、子育て中の社会的サポートに関わるもの

（1）子育て中の仕事について、利用した保育施設やサービス

・「自宅近くの認可保育所は1年以上待機中なので、勤務先への途中にある無認可の保育施設に預けている。行き帰り、時間も方向もラッシュとずれるので、子どもと一緒に電車通勤ができる」（20代）。「ファミリーサポートを知らない人も多く、自分だけ使っ

ていると訝しがられたりした」(30代)。「稽古ごとの送迎が大変。この自治体(大阪市外)では、住宅地が多く、学区がまたがるエリアの塾は送迎バスを出してくれる」(30代)。「学童だけしかない時期から『いきいき』ができて随分助かった」(50代、同じ意見が複数)。「当時は産前産後六ヶ月しか休暇が取れず、公立保育所は1歳以上でないと預かってくれなかったのので、共同保育所を自分たちで作りながらそこに預けた」(60代)。

(2) 子育てや仕事をしながらの家事、家事の分担やサポートについて

- ・「土曜日は夫が子どもを見てくれることになっていて、自分は好きなところに出かける。その代わりというのもあって、日曜日は家族で過ごすようにしている」(20代)。「自営の仕事が軌道に乗りつつある時で、実母に相当子育てをお願いした。自分でも、事務所内に寝かせて仕事していた時もある」(40代)。
- ・「夫に頼ると結局自分にストレスが溜まるので頼らない。夫と同じ職場に勤めていたが、自分が時短制度を使って保育園の送迎などを全部やった」(30代)。「地域に親戚もいないので、ファミリーサポートだけで二人目を生むのは難しいとあらかじめ」(30代)。
- ・「上の子を産んだ頃は、子どもができたなら専業主婦になるという人が周囲にも多かった。下の子の頃になると、周囲も自分も働きに出るようになっていった」(50代)。

(3) 結婚・出産等による休職・退職・復職等と、産休・育休の取得、時間短縮の利用について

- ・「同僚では、出産による退職が半数くらいある」(20代)。「育休を10ヶ月ほど取った。さらに、会社の制度が充実していたため、時短で働いた。ただし、しわ寄せを受ける同僚が不満を持っていたかもしれない」(30代)。「管理職にも女性が多かった英会話学校だが、そうした先輩達が『私たちは育休なんか無しでやってきたのだ』といわんばかりの態度で、制度があっても使いにくい状況だった」(30代)。

5. 主として現在の仕事に関わるもの

(1) 現在の職種と勤務形態

- ・今回の対象者は、事務系職員が多く、事務全般、総務関係、経理事務、などが中心。
- ・分野としては、通信設備、広告関係、育児関連、英語教育、不動産関連、病院(事務)、広報、編集などのバリエーションがあった。
- ・勤務形態は、契約社員、パート、アルバイト(掛け持ちや短期も含む)、自営、フリー、など広い形態が見られた。

(2) 仕事内容

(略)・・・個人で内容の説明の濃淡が大きい。仕事内容よりもむしろ、複数人が共通してインタビューで語り合うのに、仕事をするかどうかの選択や、転職の履歴などが中心となっていた。

- (3) 職場内の男女構成、管理職の男女比、正規・非正規雇用の割合について
- ・「派遣と契約と正社員の計11名の部署」（20代）。「メーカーの事務部門で、13名中6名は女性」（50代）。
 - ・「入社当時営業にはほとんど女性がいなかったの、会社での女性営業職の最初の世代だった」（30代）。「広告代理店時代に、営業を希望したが、女性は無理と言われた」（50代）。「入社当時（1970年代）本社の女性係長が誕生して新聞ネタになった。均等法施行の時は、総合職に対する取材が来た。自分の2年先に入った女性が、はじめて出産しても退職しなかった。職制では、部や課の長以外に、よくわからない能力資格があり、そういうものを巧妙に使い分けながら、自分より後に入った男性が昇進していくという仕組みに、だんだん気がついた」（60代）

6. 主として現在の職場のハードに関わるもの

(1) 制服の有無

- ・おおむね50代の人たちが新入社員だったころには、制服と更衣室があったようであるが、その後廃止されていった。特に窓口業務などではない内勤職でも制服の制度があることが一般的。

(2) 職場での給湯室、お茶、掃除の分担の有無や変遷

- ・お茶汲みや掃除の問題は、トップ（小さな会社の場合社長）の判断で変わっていく。特に当番は、あっても男女共に負担するように変化しているようだ。
- ・お茶汲みは個人に、掃除は当番に、と変化しつつあるが、時々「洗い物」をしないことに意識がない男性が指摘されている。「当番は男性もやるが、コップは結局洗うのが女性」（40代）。「先生と呼ばれる男性がお弁当箱を洗わずにシンクに置いていく。それを洗うのが仕事になった。自分はまあいいかと思っているが、自分が辞める時は、このまま置いても誰も洗ってくれないのですよと言ってあげなくてはならないだろう」（50代）。
- ・「雇用形態に関わらず女性だと掃除・給湯・郵便物チェックの当番のローテーションに入る」（20代）。「お局様の伝統を知らず、入社後すぐに何か気になることはと聞かれて、給湯室を女性だけが使うのはおかしくないか」といったら驚愕された。しかしその職場でもそのうち男性も掃除に参加するなど変化していった」（30代）。「お茶や掃除の関係は用務員のような男性と女性が雇われていて担当していたが、その人達がいなくなったら補充がなかった。そのあとは若い女性と男性がやるようになった。むしろそれよりずっと後の職場で、内勤の女性の仕事になっていることに驚いた」（60代）。「職場で女性ばかりがお茶汲み・コピー取り・掃除をするのはけしからんと拒否した。すごくがんばって勝ち取っていったのに、次の職場では当然のように各人がやっていて、拍子抜けするほどだった」（60代）。

(3) 職場の設備、レイアウトなどのオフィス環境

- ・特に男女の問題とは限らないが、分煙、電話などについてコメントが多かった。また、空調は、一括で調整するオフィスの場合、寒かったり暑かったりして内勤者は苦労しているようだ。

7. 主として職場と自宅の間の場所と時間の過ごし方に関わるもの

(1) 帰り道に定期的に寄る所があれば

- ・50代、60代は、ほとんどが、定期的な運動、趣味、学習、ボランティアなどにいそいでいるようだ。子育てが一段落した世代ならではの時間の使い方といえるかもしれない。
- ・「今はなくなったと思うが、当時は、お茶やお花や電子オルガンを習う社内サークルがあって、新入社員は先輩から一つ何かやった方がいいといわれ、何かに所属していた」(40代)。

(2) 帰宅前にワンストップするところがあれば

- ・帰宅の時間帯にもよるからか、さまざま。都市との関係でみれば、天王寺、心斎橋、梅田などの都心部、ターミナルを経由して帰る場合には、そこでの買い物や息抜きが楽しいという声が、20～40代にみられた。

(3) 街のハード全般についてあえて言いたいことがあれば

- ・「バリアフリーは田舎に行くときまだまだなので整備してほしい」(20代)。「クレオにきたのはじめてだが、公共施設がいろいろあるようでいて情報を知らないのもっと知りたい」(30代)。「通勤には便利だが、子育てしながら楽しく生活する想定をしていなかったため、住んでいる近くに、息抜きできるような本屋やカフェがない。ロードサイドのファミリーレストランではさびしい。実はこういうことが一番のストレスかもしれない」(30代)。

Ⅳ 大阪市に暮らす三世代（祖母・母・娘）インタビュー

都市と女性の歴史を、近代以降の中で、戦前、戦後、高度経済成長期において、都市の女性の働き方とハードに関わるまちとのかかわりを探るため、大阪市に暮らす三世代の女性に聞いた。調査対象者は郊外居住者になり都心部へ通勤する人が多く、大阪市内に三世代が続けて住んでいる市民は少なく、インタビューは1組になった。最も若い世代の孫から見て、母、祖母で、それぞれのライフヒストリーを聞いた。大正生まれの祖母、戦争直後生まれの母、昭和50年代生まれの娘である。(以下は3人の話)

“祖母”は、大阪ではなくて神戸で育った。祖母は共学の小学校を出たあと、親のすすめで女学校に進学。通学しながらさらに、和裁に茶道、華道、書道も習っていた。その後、近所の人のすすめたお見合いで、夫と結婚し、大阪に住むこととなった。戦争では空襲も経験した。子育てはもちろん、食事のために薪を用意するのが苦勞した思い出である。かまどがあってそこでご飯を炊いていた。また、この世代の家事ではどこの家でも、裁縫が必須であった。女学校時代から和裁が苦手だったが、家族の衣類はほとんど自分で用意した。大阪で夫が自営業をするかたわら、自分は近所の人からの誘いを受けて、裁縫の仕事もしていた。

“母”は、大阪市内で生まれ育った末っ子で、市内とはいえ子どもの頃は周囲が芋畑という環境だった。戦後のベビーブーム真っ只中で育ったため、小学校時代は校舎が足りず、半日ごとに交代で通学するなどしていた。中学からは、姉2人が公立にいったが、私立の女子校に進学。父が「行っておけ」と言った。卒業後は、姉の口利きで、縁故で市内の会社に入り、数年オフィス通勤をしたこともある。小さな会社で、女性は2人だけだった。朝と昼と午後三時に日本茶を淹れていた。時々「おつかい」で書類を別の会社に届けるなどもしていた。そのほかに、親戚の経営する会社で手伝いをしていたこともある。結婚はいやいやと思っていた見合いで決めた。結婚式は、難波のホテルでおこない、角隠しとドレスは両方。新婚旅行には北海道に行った。その後郊外の集合住宅に居を構えることになり、市外に転出。しかし、子育ての時期は、市内の母親に助けられた。専業主婦だったが、娘が10歳になる頃から、近所の人に頼まれて、パートタイム勤務をしはじめた。

“娘”は、昭和50年代生まれ。郊外で生まれたが、その後家族で市内に転入。結果的に母と同じ幼稚園、小学校に通った。ちょうどそのころから、学籍簿は男女混合になっていた。中学・高校は、私立に行き、その後大学を卒業。就職が厳しい時期だったが、現在の職場に就職し、勤務を続けている。祖母とは同居ではないが、よく一緒に外出する。

以上、大正生まれの祖母、戦争直後に生まれた母、昭和50年代に生まれた娘の三世代は、この80年の女性の歴史の特徴と数多く符合する人生を歩んでいる。

この三世代の簡単なライフヒストリーから、以下のような特徴が見出せる。

- ・この年齢層の三世代が、最も高い年齢層ではじまる現三世代であるが、おおむね、祖母と母の時代の急変が大きい。
- ・祖母と母の時代で、住居は全く時代が変わっている。祖母と母の時代で、家事労働は、使う道具自体が変わっている。繕い物・裁縫は、母から娘の時代にかけて、メインの家事からはずれているが、祖母から母の時代までは非常に重要であった。この部分は、「消費」によって代替されていった。
- ・祖母から母の時代で、職住近接から通勤する被雇用者への転換が起こっている。祖母の時代は夫が自営業だが、母の時代はサラリーマンであり、郊外からの通勤となった。母は学卒後結婚前まで勤めに出る、といういわゆる専業主婦時代のコースを歩んでいる。子育てが一段落してからパートに出ていることも、典型的である。職務内容も、事務職、補助的業務である。
- ・外出等については、家や職場に比べてさらに個人からの話を分析できるデータとして取り出すことは難しい。この三世代の場合は、祖母の現在の外出に、母と娘の世代の支援が役立っている。

以上から、三世代インタビューでは、ライフヒストリーの中から働くことについて考慮すべき時代背景、街のハードに関係のありそうなエピソード、男女の違いについて語られるところを取り出した。そしてそれぞれ、分野史として、雇用・労働の変化やオフィス、各場面でのハード、男女共同参画などの分野と、客観的史実として総合年表「大阪・女性の社会参画の変遷と都市のハードの変化」を作成する参考にもする。

個人の記憶は非常に曖昧なものである。出てきた話の多くは、相対的な時期であっても不確かなことが多い。それでも、確実に変化の前と後があったことがわかる。

今回のインタビューは女性のみにおこなっているが、業務内容に必ずしも関わらないハードや制度の変化について、強く印象を持って記憶している場合が多いことが特徴的であった。つまり、職場環境の変化や、通勤や買い物の方法というものは、就職を決めたり住む場所を決めたりする「個人的」な人生の選択と並んで、瑣末であるとして捨てることができないほど重要な問題であったといえるのではないだろうか。

まとめ

祖母・母・娘の三世代では、ライフコースの選択と社会構造が激変していることが再認識された。また勤務経験のある世代別インタビューでは、予測したように、①家族に関わるもの、②住生活に関わるもの、③勤務先と勤務経験の経緯に関わるもの、④子育て経験のある人に対して子育て中の社会的サポートに関わるもの、⑤現在の仕事に関わるもの、⑥現在の職場のハードに関わるもの、⑦職場と自宅の間の場所と時間の過ごし方に関わるものに整理される。三世代と世代別女性のインタビューから、この80年間の急激な社会変化が女性や家族の生活に大きな変化をもたらしたことが分かった。戦前と戦後の世代の生活の違いが大きいことは予測できたが、学卒期に就職して都心部に通勤して、家庭を持ち、子育てした昭和世代と、今日の若年層は、一見似ているライフスタイルであっても、その内実を規定する社会や企業の規範が大きく異なってきていることも分かった。

職場と住居と移動では、大阪市は周辺都市からの流入人口が多く、昼夜間人口比率は全国で最も高いという都市構造を持っていることが分かった。その中で、特に大阪への流入人口の男女差が特徴的である。つまり、周辺都市（郊外）から大阪市内に流入する在勤女性を見ると、29歳をピークに下降の一途をたどり、女性の就業に関するM字型曲線を描かない。結婚・出産を期に退職し、大阪市内に通勤しないと見られ、流入人口の減少が顕著となる子育て世帯以降の女性が、働き続けられるような都市環境整備が必要になっていることを示して

いる。

参考文献

- ・浅野慎一等編『京阪神都市圏の重層的なりたち』昭和堂、2008年
- ・対馬義幸他編「梅田センタービル物語」彰国社、1988年
- ・大阪市「年報・大阪市都市計画2007」2008年
- ・大阪市都市住宅史編集委員会『まちに住まう・大阪都市住宅史』平凡社、1989年
- ・西山卯三『日本の住まい』勁草書房、1957
- ・住宅問題研究会『住宅問題事典』日本住宅総合センター、1993年
- ・鈴木成文他『51C・家族を容れるハコの戦後と現在』平凡社、2004年
- ・大阪市交通局『大阪市営交通創業100年これからもよろしく』2003年
- ・大阪市史編纂所編『大阪市の歴史』創元社、1999年
- ・芝村篤樹『都市の近代・大阪の20世紀』思文閣出版、1999年
- ・空気調和衛生工学会編『オフィスビルの空気調和・給排水衛生設備デザイン』オーム社、2003年
- ・大阪市「大阪市男女共同参画基本計画」2000年
- ・内閣府男女共同参画局『男女共同参画社会をめざして』2007年
- ・大阪市『男女共同参画法律資料集』2007年
- ・金野美奈子『OLの創造・意味世界としてのジェンダー』勁草書房、2000年
- ・石月静恵『近代日本女性史講義』世界思想社、2007年
- ・『婦人公論』24巻3号、1939年
- ・柴田悦子編『女たちの戦後史』創元社、1989年
- ・「都会の迷宮丸ビルの女」『婦人世界』20巻2号、1925年
- ・大阪ビルディング協会『20世紀から21世紀へ』（大阪ビルディング協会70周年記念誌）
- ・交通エコロジー・モビリティ財団編著、国土交通省総合政策局消費者行政課監修『すべての人にやさしいトイレをめざして／公共交通ターミナルにおける高齢者・障害者などの移動円滑化ガイドライン検討委員会報告書』大成出版社、2002年
- ・おんなの目で大阪の街を創る会『ひとにやさしい駅へ・市民グループからの提案』新明弘社、1999年
- ・「アップリカ葛西・親心をつかんだ気配りベビーカー」『日経ビジネス』6月23号、1986年
- ・加藤翠「わが国における乳母車の歴史的考察」『日本女子大学紀要・家政学部』22号
- ・大西正幸『電気洗濯機の100年の歴史』、技報堂出版
- ・大阪市こども青少年局『保育所一覽』Webデータ
- ・植山、浦辺、岡田他編『戦後保育所の歴史』全国社会福祉協議会、1978年
- ・大阪市・大阪府「大阪心ふれあうまちづくり賞・受賞作品」1994年～2005年

女性の社会進出と住居・職場・都市構造の変化の関係性の分析に関する研究（一）

〈キーワード〉

女性、社会進出、都市構造、住居、職場